歴史を歩く ⑤

町文化財紹介コーナー

「田の神さぁ」

田の神

今ぐらいの時期、毎年のように田の神についての依頼が2、3件ある。「田の神を見られる場所の所在と、田の神像についての資料を送ってほしい」といった内容だ。そしてその依頼人の多くは、写真家であったりする。写真家にとっては、青々と広がる田んぼを背景にした田の神の姿が魅力的であるようだ。

我々にとって身近な存在である田の神は、全国的に信仰されている。しかし、特異な形態の田の神像を作り、祭っているのは、鹿児島県と宮崎県諸県地方、つまり藩政時代に島津氏が治めていた地域に限られる。私たちが普段目にする田の神像は、郷土が生み出した独自の文化なのである。

江戸時代中期の1700年ごろから、全国の各藩が開田を進め、増収を図るようになる。薩摩藩もまた、この頃領内各地の開田事業を積極的に行った。そして、水路の安全を願って水神を祭り、豊作を願って田の神を祭るようになった。

田の神像は、真言宗の修験者、すなわち山伏によって生み出されたものだという。当時、山伏は庶民の生活に密着した活動を行っており、一般の農民に厚く支持されていた。そして、修行のため各地を歩き回った山伏は、各地の農業を見て回り、地域に見聞を広めていった。山伏は時として、農業の指導者でもあったのである。多くの田の神像が、山伏の姿を連想させるのは、こういったことに由来する。

ちなみに、田の神は頭からこしきを被って、杓子とすりこぎを持っているのが一般的な正面の姿であるが、背後の姿は、男性の性器が表されている。命を産み出すものを神聖化し、敬う日本古来の精神は、ここにも表現されている。

昭和59年度に大崎町教育委員会が行った調査では、町内に77体の像があるとしているが、調査漏れのものがある可能性が強いとしている。なお、田中集落の田んぼに設置されている田の神像は、町内で最も古く、文化11年（1814年）に作られたものである。

田中集落の新越家に祭られている田の神像と立小野にあるお坊さんの姿をした田の神像は、町の指定を受けている。

今から8年前に田の神像の写真撮影のため来町した写真家の榊晃弘氏の言葉が、今でも印象的に私の心に残っている。

「各地で田の神の写真を撮っていると、面白いもので、それぞれの地域で表情が違いますね。悲しい顔が多いところもあれば、すました顔が多いところもあって…。当時の地域性とか、その地域の社会背景とかが、表れているのでしょうかね。」

ファインダーを通した写真家の目は、田の神の表情を鋭く捉えている。田の神の表情に当時の社会性や地域性が刻まれているとすれば、民俗学的にも面白い。

「大崎町の田の神像は、どのように感じました？」という問いかけに、榊氏は少し興奮気味に答えた。

「本当にユニークなものが多いですね。田の神もあどけない表情をしていますね。きっと大崎町の方々はおもしろくて、優しい人が多いのでしょうね。」

今年の春もまた、町内各地に田の神が降りてきた。秋が終わり、山に帰るまでの間、その愛らしい眼差しで、稲の成長を見守り続ける。

【大崎町埋蔵文化財専門員　内村憲和】